

# 松波むかし語り

ここに生き続けて

その21

今回のお客様

町会理事、中央水道（株）会長の

ほそや りょうじ  
**細谷 良治**さん 81歳 3丁目

“商売は嫌いじゃないから、いまもテレビをみながら、何がはやるのか研究してます”

商売の手腕と人当たりの良さ、それが細谷さんを仕事と街の活動に駆り立ててきたんですね。



ここにも、松波町会を長く支えて来られた方がおられました。細谷さんはいまも現役の町会理事ですが、4代目・野平会長の時代から堀田会長の途中まで、防犯部長や副会長を歴任しました。「昭和40年代半ば、当時はどの家もカギなんて掛けてなかった。それを、カギを掛けるよう呼びかけて、当時、松波がモデル地区にも選ばれたんです」。でも、細谷さんの町会での“業績”を代表するものは、現在の公民館への建て替えでした。「千葉競輪からの迷惑料を積立ててあったのと市からの補助金、それに寄付を集めて間に合わせました」。“みんなが使える”、それが新しい公民館の一番の目的だったと言います。「当時、家が狭くて、家では葬式もできなかった。だから、葬式は公民館ですいぶんやりましたよ」。「せっかくみなさんの寄付で建った公民館です、家族葬も増えてきているいま、そうした形で公民館をもっと利用してほしい」というのが細谷さんの願いです。

細谷さんでもう一つ忘れてならないのが、弥生小PTAから続く社会体育の活動です。校庭開放や体育用具の貸し出しなど、運営委員長として30年の付き合いになります。先日、弥生小が「30人31脚」で全国準優勝に輝いたときも、指導した井上先生の慰労会を開き、また、「30人31脚第1回千葉市記録会」を開いた際には、大会運営委員長も務めました。

細谷さんは東金の生まれ、戦時中、予科練に志願したものの、「戦争も末期で、やらされたのは土方ばかり」だったそうですが、「（東京駅のある）八重洲から人形町まで見渡せた」ほどの焼け野原を目にして、大学時代は建築を志しながら、就職した所はなぜか水道屋。「それまで水道屋という仕事があるのさえ知らなかったのに、間違っちゃってしまった」そうですが、東京オリンピックを機に都内はトイレの水洗化ラッシュ、仕事はいくらも。



松波に移ったのは昭和32年、「公共工事をやりたくて越してきました。その頃千葉県内はまだ水道が未整備、成東・山田町・酒々井町・八千代町（市）、いまは千葉市になった土気町なども工事に出かけました」。当時の厚生省から補助金が出て、工事をどんどんこなしていきました。「商売は嫌いじゃない」と言う細谷さん、船橋・八千代・成田にも支店を置き、また千葉駅近くに割烹料理屋まで開いてしまったほどです。

松波については、「年寄りが増え、核家族化して、親子のつながりも薄くなりました。社会福祉協議会の人たちにもがんばってもらいたいけれど、緊急を要する事態を考えると、もっと隣り近所のつながりを再生させていきたいですね」。